

静御前(しずかごぜん)縁の安藤

吉野山嶺の白雪踏せ分けて

入りにし人の跡ぞ恋しき

静の舞は、神に聞きとどけられる程の舞として、水飢饉の折雨乞いに鶴ヶ岡八幡宮で大勢の大名小名を前に、義経を思う胸の中の思いを、うたい舞った恋歌で大変有名です。その磯の禅師の娘静は、名将義経と戀になり御子を妊りましたが、生まれて間もなく頼朝の命令で殺されてしまいました。信心深い静は世をはかなんで出家し、義経の奥州下りを知って義経を慕い、北へ北へと向っていつあえるあてもない旅を続けました。

長い苦難の旅も、ようやく行田を経て羽生に入りました。梵天川(井泉)と中川の合流点の橋の上からの眺は、清流誠に美しく、侍女と三人しばらく橋の上で憩い、おりしも十三夜の冴た月が川面に金波銀波にゆれ動き、葦を渡る涼風に乱舞する螢の群は悲しく寂しい思いをいやしてくれ、「わらわは安堵せり」と静御前は申されました。

それから、この地を安堵と呼ばれいつか文字が変わって安藤になりました。

義経一筋に生きた静御前は、悲しみが心に積もりすぎた

ためか栗橋にて若く美しい生涯を空しく閉じました。



あんど橋